琉球大学学術リポジトリ

カタカナ英語を利用した英語の授業：世界諸英語（World Englishes）の観点からの英語教育

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院教育学研究科
	公開日: 2017-05-12
	キーワード (Ja): カタカナ英語, 世界諸英語（World Englishes）, ○×の札, クイズ形式
	キーワード (En):
	作成者: 髙良, 宣孝, Takara, Nobutaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36609

カタカナ英語を利用した英語の授業

―世界諸英語（World Englishes）の観点からの英語教育―

髙良宣孝

Teaching English by Using *Katakana* English
: English Language Education from a Viewpoint of World Englishes

Nobutaka TAKARA

琉球大学大学院教育学研究科
高度教職実践専攻（教職大学院）紀要
第 1 巻
Department of Teacher Education
Graduate School of Education
University of the Ryukyus
No. 1
2017年 3 月

【実践報告】

カタカナ英語を利用した英語の授業

―世界諸英語（World Englishes）の観点からの英語教育―

髙良宣孝

Teaching English by Using *Katakana* English
: English Language Education from a Viewpoint of World Englishes

Nobutaka TAKARA

要　約

この実践報告では，「カタカナ英語」を利用した英語の授業について報告する。特に次の2点に焦点を当てていく：⑴４つの特徴（①カタカナ英語を利用した英語の授業，②○×の札を利用したクイズ形式の授業，③１セッション15分間程度という制限，④パワーポイントを駆使した授業）を活かした英語の授業，と⑵世界諸英語（World Englishes）の視点からの「カタカナ英語」，である。第１に，これまで筆者が小学校を中心に実践してきた授業における４つの特徴について詳述する。第２に，上記の「カタカナ英語を利用した英語の授業」との関連から，一般的に考えられている「『カタカナ英語』＝『誤った英語』」という認識は適切ではなく，世界諸英語（World Englishes）という観点から捉え直すと，「カタカナ英語」は英語の一変種であること，そしてそれを利用することで標準的なイギリス英語やアメリカ英語を学習することが可能であることを示す。最後に，これまで上記２点を意識して授業を行なってきた経験から，２つの提言を行なう。第１に，４つの特徴を活かした授業は小学校での英語教育のみならず，中学校・高校での英語の授業においても有効に活用した方が良い，ということを提言する。第２に，英語教員を目指す学生は世界諸英語（World Englishes）の基本的な知識を学ぶ必要がある，ということを提言する。

キーワード：カタカナ英語，世界諸英語（World Englishes），○×の札，クイズ形式，

１．はじめに

IT が発達し，国際化が進む昨今，英語は世界共通語（リンガフランカ）としての地位をより強固なものとしていると言えよう。しかし，英語を話す世界中の人々が，皆常にイギリス英語やアメリカ英語といった，いわゆる「標準的な英語」を使用しているのであろうか。実際には，世界中の多くの英語話者，特に英語が第２言語や外国語である人々は，彼らの第１言語や彼らが生活する国や地域の文化の影響を多少なりとも受けている英語を話している。換言すると，英語は多様化し多くの変種が生まれており，その変種を多くの話者が話しているという状況である。このような英語は専門的には「世界諸英語（World Englishes）」と呼ばれている。

では，日本人の英語はどうだろうか。日本人が話す英語にはいくつかの特徴が見られるが，その中の１つが，日本人が作り出した「英語風の単語」，「カタカナ英語」であろう。「カタカナ英語」と聞くと，多くの日本人はどのような印象を抱くであろうか。恐らくは，「間違った英語」，「実際には使えない英語」，と言った否定的な印象を持つ人が多いだろう。では，「カタカナ英語」は本当に使えない，間違った英語なのだろうか。先に述べた「世界諸英語（World Englishes）」の観点から考えると，「カタカナ英語」は日本語や日本の文化が影響している語彙であり，その観点から考えると，「カタカナ英語」も「立派な」英語

琉球大学法文学部国際言語文化学科英語文化専攻

の一変種と捉えることができる。

では，この日本で作られた「カタカナ英語」をうまく教育現場で利用できないものだろうか。「カタカナ英語」を導入しながら，イギリスやアメリカの「標準的な英語」を学習できないだろうか。このような考えの下，筆者は，2014年から筆者を含む３名の教授・准教授で行なっている出前講座の中で，「カタカナ英語」を利用した英語の授業を実践している。この実践報告では，筆者が2015年から取り組んできた「カタカナ英語」を利用した英語の授業について報告する。

この報告書の構成は次の通りである。第２章では，実際にどのような流れで授業を行なっているかを示し，更にこの授業実践で見られた４つの特徴を詳述していく。また，授業を実践していく中で見えてきた問題点にも触れ，その解決法についても簡単に述べる。第３章はこの報告のまとめ及び今後の英語教育に対する２つの提言を述べる。

２．実践内容

この章では，筆者が実践している出前講座内の「カタカナ英語」を利用した英語の授業について述べる。第１節では，これまで行なってきた授業のリストを示しながら，授業の概要を説明する。第２節では，この授業で見られる４つの重要な特徴を詳述する。第３節では，これまで実践してきた授業の中で気付いた問題点を述べ，その問題点をいかにして克服してきたか，について言及する。

⑴　授業の概要

筆者は，琉球大学の「ちゅら島の未来を創る知の津梁（かけ橋）」事業の一環として，法文学部国際言語文化学科英語文化専攻と外国語センター（現国際教育センター外国語ユニット）が行なっている「外国語教育・異文化理解のための継続学習プログラム」の一員である。このプログラム内のプロジェクトの１つとして出前講座があり，筆者を含む３名の教員で2014年より主に琉大から遠隔地にある小・中学校，高校に赴き，自文化・異文化に関する出前講座を行なっている（実際に筆者がこのプログラムに参加したのは2015年からである）。また，2015年には，りゅうぎんディーシーより助成金の交付を受け出前講座をさらに充実させてきた。今回の実践報告では，この出前講座で筆者が担当している世界諸英語（World Englishes）の観点からの英語教育，特に小学校におけるカタカナ英語を用いた英語教育の実践例を紹介する。

これまで行なってきた出前講座は33回（2017年３月１日現在）になるが，その内小学校で行なったカタカナ英語を用いた授業は14回になる。また，この出前授業とは別に，琉球大学のジェンダー協働推進室が2016年度に実施した学童保育プログラムにおいて，英語プログラムと称して学童保育に参加した小学生へ同様のカタカナ英語の授業を８月４日に行なった。従って，これまで行なってきた「カタカナ英語」を用いた小学校での授業は計15回となる。表１は，これらの授業を行なった小学校（またはプログラム名）及び実施時期をまとめたものである。

基本的に授業の受講生は，当該小学校の児童及び教職員である。ただし，表１の５番目の水納小中学校では，中学生が１名のみという事情であったため，小中学生を１クラスにまとめ，さらに教職員のみならず一般の島民を招き授業を行なった。

次に，基本的な授業の流れを紹介する。授業は一貫としてパワーポイントを利用している。まず初めに，児童にパワーポイント内の画像やある単語に関する簡単な質問文（例えば、「２月14日は何の日？」）を見せ，普段それらを何と言っているか答えてもらう。その際対象となる単語は全て一般的にカタカナ表記され，児童にとって比較的親しみのあると考えられるものに絞っている（例としては，「フライドポテト」，「バイキング」，「ガソリンスタンド」，等である）。また，時期的に適切と思われる場合は，「バレンタインデー」，「ホワイトデー」，「ゴールデンウィーク」といった単語も使用

表１　カタカナ英語を用いた講座の実施校及び実施時期

No.	実施校（またはプログラム名）	実施時期
1	大原小学校（竹富町）	2015年２月12日
2	古見小学校（竹富町）	2015年２月13日
3	久高小学校（南城市）	2015年５月22日
4	長田小学校（宜野湾市）	2015年６月15日
5	水納小中学校（本部町）	2015年９月９日
6	伊是名小学校（伊是名村）	2016年２月16日
7	北国小学校（国頭村）	2016年２月18日
8	奥小学校（国頭村）	2016年３月８日
9	佐手小学校（国頭村）	2016年３月９日
10	野甫小学校（伊平屋村）	2016年３月15日
11	安波小学校（国頭村）	2016年６月24日
12	安田小学校（国頭村）	2016年６月24日
13	学童保育プログラム（琉球大学ジェンダー協働推進室主催）	2016年８月４日
14	玉城小学校（南城市）	2016年10月27日
15	志真志小学校（宜野湾市）	2017年２月20日

している。その後，これらの単語がアメリカ・イギリスで使われている「標準的な英語」（実際には児童にも分かりやすくするため「本物の英語」という表現を使用している）か，それとも日本で作られた「カタカナ英語」なのかを考えてもらい，「標準的な英語」なら○の，「カタカナ英語」なら×の札を挙げて答えてもらう。その後，パワーポイント上で正解（○または×）を発表し，よりゲーム感覚の強いスタイルでの授業を進めていく。その後，講師がそれぞれの「標準的な英語」を発音し，その単語を児童に繰り返し発音してもらう。さらに，イギリス英語とアメリカ英語とで表現が異なるものは，その違いを説明し，また可能であれば，それぞれの単語やその関連語に関連する豆知識や小話を紹介する。以上が全体的な授業の流れであり，これを表２にまとめる。

表２　カタカナ英語を用いた授業の流れ

１．パワーポイントでカタカナ表記を用いる単語の画像やそれに関する簡単な質問を見せる。
２．児童に普段それらを何というか答えてもらう。
３．児童にその「単語」が「標準的な英語」であれば○，「カタカナ英語」であれば×の札を挙げてもらう。
４．パワーポイントで答えを示し，実際の英語の発音を練習する。
５．可能であれば，英米での表現の違いや豆知識などを紹介する。

実際にこの手法が確立していったのは，表１の４回目の長田小学校での出前講座からである。それ以前の出前講座では，後で詳述する通り，○×の札を使用せず講師の説明が主体で，児童には時々問いかけるといった形式であったが，現在の手法がより効率的・効果的な授業となると考え改良した，という経緯がある。

⑵　具体的な実践方法と４つの特徴

この節では，授業の具体的な実践方法について，特に重要な４つの特徴に言及しながら説明していく。この４つの特徴とは，①カタカナ英語を利用した英語の授業，②○×の札を利用したクイズ

形式の授業，③１セッション15分間程度という制限，④パワーポイントを駆使した授業，の４つである。以下，それぞれの内容について詳述する。

まず，第１の特徴である「カタカナ英語を利用した英語の授業」についてである。授業の中では，カタカナ英語の定義を「日本で作られた『英語風』の単語」とし，和製英語と同等のものとして扱っている。また，カタカナ英語は，「英語が話されている国々（アメリカやイギリス）では，別の言い方をするので，全く意味が通じなかったり，別の意味としてとらえられてしまうこともある」と授業の導入段階で児童に説明している。

カタカナ英語を用い「標準的な英語」の語彙を学習する際，最も気を付けるべき点は，「カタカナ英語」を「間違った英語」と導入しないことである。一般的には，カタカナ英語は日本でのみ通用し，実際英語を第1言語として使用している国々では通用しないケースが多いことから，「間違った英語」「使用してはいけない英語」として考えられている。しかし，この「カタカナ英語」を世界諸英語 (World Englishes) という観点から捉え直すと，決して無視することのできない，日本で話される英語では不可欠な日本特有の語彙と考えることができる。世界諸英語の枠組みでは，‘Identity-Communication Continuum’という概念が存在する (Kirkpatrick, 2007, pp. 10–14)。個人が所属するコミュニティにおいて，よりそのコミュニティにおける文化やその個人の持つアイデンティティを前面に出した英語でコミュニケーションを行なう場合，その時に話している英語を ‘Identity’ 寄りの英語，換言すればその個人の訛りやその個人の第１言語の影響を大きく受けた英語のことを指す。その一方で，世界中どこでも話者同士問題なくコミュニケーションが取れる場合，その時に話している英語を ‘Communication’ 寄りの英語とし，このような英語はいわゆるイギリスやアメリカで話されている「標準的な英語」(BBC English や General American に相当する) となる。そして，個人がどのような状況・立場で英語を用いるか，つまりその人が同じ出身地の人たちと地元やあるいは異国の地で英語で会話するのか，それとも国際会議や学会発表といった公式な場で英語を話すのか，により，英語の変種 (varieties) を使い分ける，という考え方がこの ‘Identity-Communication Continuum’ である。図１は，この概念を図示したものである。

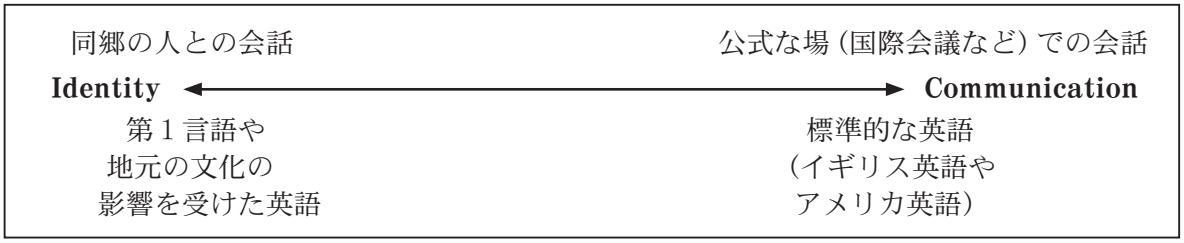

図１．Identity-Communication Continuum と英語の変種の関係

英語が国際的なコミュニケーション・ツールとして使用されている中，適切な場面で日本人が日本の文化や日本語の影響を受けた英語を使用すること自体は決して否定されるべきことではない。実際に諸外国での例を見ても，標準的な英語とは異なるその地域特有の語彙を使用しているケースは多々ある。例えば，‘bush’ は，標準英語では「低木、低木の茂み」という意味になるが，オーストラリア英語では「オーストラリアの奥地，田舎の生活」という意味になる (Kirkpatrick, 2007, pp. 72–73; Moore ed., 2011)。また標準英語では「中古車」のことを ‘used car’ や ‘second-hand car’ と言うが，ナイジェリア英語では，中古車がベルギーから多く輸入されている為，‘Belgian’ という単語を用いて表現している (Kirkpatrick, 2007, p. 104)。

実践例のように，カタカナ英語を「日本特有の英語の語彙」として捉え，それらを用いてより一般的に通用する「標準的な英語」を導入していく手法は，決して児童生徒の英語学習の妨げにはなら

ず，むしろ今後推奨されるべきものと筆者は考える。その最大の利点は，児童生徒自身ターゲットとなる語彙を十分に理解しているということである。普段から会話で用いているカタカナ英語を通して，イギリスやアメリカではどのような表現を用いているか，を学ぶことで，その単語を比較的容易に学習できるのではないか，と推測できる。さらには，児童生徒が英語学習の中で抱くであろう「英語に対する苦手意識」を多少なりとも軽減できるはずである。さらに，日本で使用している「カタカナ表記の英語」の全てが「和製英語」ではない。例えば「パンケーキ（‘pancake’）」は発音が日本語の影響を受けてはいるものの，単語自体は英語のそれをそのまま使っている。このような単語に加えて，元々カタカナ英語でありながら，少しずつ英米でも受け入れられている単語もあり，カタカナ英語の１つである「ナイター（標準英語では ‘night game’）」について山田 (1995) は，「たしかに，ほとんどの本には nighter といっても通じない，とかいてありますが，実際には，日本からアメリカに逆輸入されアメリカでも使われ始めています」と述べている。上記で述べたことを総合的に判断して，英語の語彙習得，特に小学校での授業での語彙習得において，カタカナ英語を活用した授業を行なうことは推奨するに値するものと考える。

次に，第２の特徴が「○×の札を利用したクイズ形式の授業」である。前述の通り，初期の段階，つまり１番目の大原小学校から３番目の久高小学校までは，講師が主に説明をする形式を取っていた。児童に対し質問をして発言を促したり，英単語を繰り返えして発音してもらったりと，出来るだけ児童が積極的に授業に参加できるよう工夫を試みたが，やはり児童が受身になってしまうという状況から抜け出すことは容易ではなかった。録画した DVD で児童の表情を観察したり授業の最後にもらう児童の感想などを聞いたりする限り，児童は内容自体には興味を持ち，授業を集中して聞いている様子は窺えるのだが，積極的に授業に参加しているかといえば，講師が主体の授業ではそこまでに至るのは困難だった。この状況を打破し，児童に授業により積極的に参加してもらうために，４番目の長田小学校から，○×の札を小学生に与え，クイズ形式で「標準的な英語」か「カタカナ英語」か，を考える形式へと変更した。その結果，児童はこれまでの講師主体の授業に比べ積極的に授業に参加するようになった。

○×の札を利用する最大の利点は，児童が抱く「照れや恥ずかしさ」といった感情を軽減できることである。講師からの質問に直接答えることは，非常に勇気のいることであり，多くの児童が恥ずかしさを感じなかなか発言ができないケースが多い。これは小学生に限ったことではなく，中学生や高校生，更には大学生にも実際に見られることである。しかし，○×の札を挙げて回答することにより，直接発言せずにゲーム感覚で自分の考えを示すことができる。その結果，「照れや恥ずかしさ」は軽減され，授業により積極的に参加することができるようになる。実際に○×の札を挙げて回答する方式に切り替えてから，児童の授業への積極的な参加が見られるようになった。また，クイズ形式を取り入れたことで，授業にメリハリがつくようになった。クイズ形式で問題に取り組んでいる間，児童は周りの友人と競い合いながら取り組む様子が観察できた。その一方，講師が単語に関する説明を行なっている間は，講師の話を集中して聞く姿勢が見られた。以上のことから，○×の札を利用したクイズ形式の授業を取り入れることで，児童の「照れや恥ずかしさ」を軽減でき，授業にメリハリをつけることが可能となり，授業をよりスムーズに進めることが可能になると筆者は考える。

第３の特徴は，「１セッション15分間程度という制限」である。第１節で述べた出前講座では，３名の教員による３つの授業を行なっているのだが，その際は学校の授業の１コマ（小学校の場合は１コマ45分授業）の中で３つの授業を行なっている。この場合，１名当たりの持ち時間は12～13分程度と制限される。一般的に12～13分という短い時間で何ができるのか，と疑問に思う人も少なくはないだろう。しかし，人間の集中力，という点から考えていくと，逆にこの時間的制約がプラスに

働くのである。集中力.net (http://comesmile.net/cons/05.html) によると，集中力の周期が15分であり，小学校低学年の場合は15分を超えると集中力が切れて飽き始める，と言われている。実際にこの出前講座では，この時間的制約を逆手に取り，小学校・中学校・高校で行なう１つの授業を15分程度とし，15分ごとに話題を変え３つの異なる授業を行っている。授業の最後に児童に感想を述べてもらうことが多いが，毎回ほとんどの児童から３つの授業に対する感想が得られている。このことからも分かる通り，15分間という限られた時間での授業を行うことで，児童はそれぞれの授業を集中して受け，その内容をしっかり学習することが出来ているわけである。この集中力の周期に関しては，筆者が個人で琉球大学のジェンダー協働推進室主催の学童保育プログラムで行なった授業と比較することで明白となった。この学童保育プログラムでは，筆者一人でおよそ30分程度の授業を行なったが，15～20分を越えた頃から児童の集中力が途切れ始め，教室の床に寝転んだり，もじもじし始めたりする児童が少しずつ増加していった。この時は，少し話題を変えたり話し方を変えたりすることで継続することができたが，やはり15分と言う集中力の周期を考慮して授業を行なう場合と，全く無視して進めた場合とでは，その違いが明白となった。

この15分周期の利用は，通常の授業にも応用できることである。つまり１つのアクティビティを15分以内に区切って行うことで，それぞれのアクティビティに集中して取り組むことが可能となり，その結果学習内容のさらなる定着も可能であると考える。

最後の特徴が，「パワーポイントを駆使した授業」である。この授業では，パワーポイントを利用して授業を進めたが，その際特に様々なアニメーション機能を用いて，文字や写真が画面上に現れるように工夫した。これまでの形式としては，クイズ形式を取り入れた「ゲーム感覚」での授業を行なってきた。つまり，ある画像を児童に見せ，それがまず日本では何と言われているかを児童に問いかけ，児童の反応を見てその正解を画面上に出現させた。さらに，それが「標準的な英語」か「カタカナ英語」か，を問うクイズの場合も，その正解（○か×か）は画面上で提示した。このように，パワーポイント，特にそのアニメーション機能をうまく利用し，画面上でも「動き」をつけることで，児童の興味を引き，授業自体に集中してもらうことが可能となった。

⑶　授業で気付いた問題点とその対処法

最後に，この出前講座を通して最も困難だった点について述べる。それは，児童に「カタカナ英語」を含む英語について話をする際，どのようにしてその単語を表記したらよいか，という点である。小学生，特に低学年の場合，実際にアルファベット表記の単語に慣れているわけではない。従って，児童が不必要に混乱してしまうのを避けるため，全ての単語をカタカナで表記するほかなかった。しかし，カタカナ表記のみでは，英語に見られる発音の特徴，例えば [l] と [r] の発音の違いや音節末や語末の発音が子音で終わっているような単語を正確には表示することは不可能である。例えば，apar<u>t</u>men<u>t</u> [əpɑːrtmənt]は「アパー<u>ト</u>メン<u>ト</u>」と言う表記になり，音節が子音で終わっていることを表すことは難しい。また，実際の英語の発音に近づけた「アパー<u>トゥ</u>メン<u>トゥ</u>」のような表記を用いたとしても，逆に混乱を招く恐れもある。

では，表記と発音との乖離をどうするか，という問題に対してどのような解決方法が考えられるだろうか。現時点での最適な解決法は，カタカナ表記はあくまでも「その単語を認識してもらうための一時的な表記」として割り切り，発音の面では「実際に講師が発音し，その発音を児童に模倣してもらいながら英語の音声に慣れてもらう」という方法だと筆者は考える。実際に，児童の発音を聞いていると，１度目の発音は明らかに「カタカナ表記」につられた発音をしているが，実際に講師がより正確な発音をすると，児童はその発音を真似て発音し始めることが観察できた。このことから，講師側がしっかりとした発音をし，児童に聞かせ真似てもらうことが非常に重要であることが分かる。

３．まとめと提言

この実践報告では，筆者が2015年から活動している出前講座におけるカタカナ英語を用いた英語の授業について述べてきた。一般的に，カタカナ英語は英語教育では「間違った英語」として捉えられ，比較的敬遠されがちな語彙である。しかし「世界諸英語 (World Englishes)」という枠組みでは，日本人が生み出した「カタカナ英語」自体が「日本人の英語」の特徴を示す語彙として捉え直すことができる。世界諸英語という概念の下では，「カタカナ英語」も立派な英語の１つであり，それを利用した授業は十分に活用できるものであることを述べてきた。

また，この報告書では，これまで行なわれてきた授業で見られる４つの重要な特徴（①カタカナ英語を利用した英語の授業，②○×の札を利用したクイズ形式の授業，③１セッション15分間程度という制限，④パワーポイントを駆使した授業）を紹介した。この４つの特徴をうまく取り入れることで，より効率的で児童が積極的に参加できるような授業を実践できることを示した。

最後に，授業を通して気付いた英単語の表記の問題について触れた。発音と言う点では，現在使用しているカタカナ表記には様々な問題が含まれているが，講師が正確な英語の発音をし，それを児童に聞かせその通りに発音してもらうことで，発音面に関するカタカナ表記の問題は解決されることを述べた。

ここで，第１章でも述べた２つの提言を行ないたい。第１の提言は，「４つの特徴を活かした授業は小学校での英語教育のみならず，中学校・高校での英語の授業においても有効に活用したほうが良い」と言うものである。授業全体をクイズ形式にすることは難しいであろうが，例えば授業冒頭のウォームアップとして，カタカナ英語を用いたクイズ形式で語彙力を増強させる，という方法であれば無理なく行なえるであろう。また，15分間（状況に応じてもっと短い時間）という短時間で１つのアクティビティを行なうことも重要である。児童生徒の集中力を維持させるためには，短い時間で１つのアクティビティを行ない，次のアクティビティに移ることでメリハリをつければ，50～60分の授業でも集中力は十分に続くものと考える。

第２の提言は，「英語教員を目指す学生は世界諸英語 (World Englishes) の基本的な知識を学ぶ必要がある」というものである。一般的に学校で学習される英語はイギリス英語やアメリカ英語である。しかし，世界中でコミュニケーションを行なうために使われている英語は，話者の第１言語や話者の住む国や地域の文化を反映したものとなっている。日本人が使用しているカタカナ英語も，日本語や日本文化の影響を受けた一変種であることは既に述べた。このような「世界の英語」の事情を知ることなく，「『英語』イコール『イギリス英語・アメリカ英語』」という固定観念だけで英語の授業を行なってしまうと，逆に児童生徒は「常にイギリス人やアメリカ人のような英語を使わなければならない」という誤った解釈をしてしまう可能性がある。英語には様々な変種があり，その変種を話者は必要に応じて使い分けている，という事実を教師自身が理解し，それを児童生徒に伝えることも英語教育では重要ではないだろうか。そういう意味で，教員を目指す学生は，世界諸英語 (World Englishes) についての知識をしっかりと学び，様々な形で授業に活かしていく必要があると筆者は考える。

筆者が行なっている授業は，日本人にとって非常になじみの深い「カタカナ英語」を利用し，その単語がイギリスやアメリカで使用されている「標準的な英語」では何と言われるのか，をゲーム感覚で学ぶという授業である。このアプローチは，比較的新しい試みかと思われる。日本人が生み出した「カタカナ英語」を敢えて利用し，「標準的な英語」の単語と比較をし，その違いに興味を持ってもらいさらなる学習意欲を児童に持ってもらえることを期待し，今後も実践を続け，また将来的にはこのアプローチによる授業を広めるため，教材開発を手掛けていく予定である。

[文献]

Kirkpatrick, Andy, 2007, *World Englishes: Implications for international communication and English language teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.

Moore, Bruce ed., 2011, *Australian Modern Oxford Dictionary Fourth Edition*, Victoria: Oxford University Press, p. 99.

山田雅重, 1995,『アメリカ人の知らない英語：和製英語のすべて』丸善, p. 142

集中力. net, 人間の集中力の限界, http://comesmile.net/cons/05.html (2016年11月29日)